

ロックウェル推薦図書 2010年6月  
『配達あかずきん』など 大崎梢

今月は若い女性が活躍する推理小説を選んでみました。書店で十三年間勤めた大崎さんが、成風堂という書店を舞台にして起こる日常のちょっとした謎をテーマに書き下ろしたシリーズです。殺人などの凶悪犯罪は少なく、さわやかで心温まる読後感が得られる作品集で、これまでに三冊出ています。人気シリーズなので一般的な紹介はネット上にあふれていますから、こちらは二人の主人公に焦点をあてた学習塾らしい推薦文にしましょう。

杏(きょう)ちゃんーワトソン役の職人店員

木下杏子さんは二十四歳、短大時代から書店で働いている、しつかり者の成風堂社員です。お客様などから相談を受け、解決できない謎を多絵ちゃんに伝える、ワトソン氏の役回りをします。

読んで感心するのは杏ちゃんの働きぶりです。書店がこんな忙しい職場だとは知りませんでした。しかもお客様の問合せがすごい。書名、著者名を忘れただけでなく、内容もよくわからない本を探してくれというおばさんが登場します。

組織に忠実なのが「サラリーマン」で仕事に忠実なのが「職人」だ、と養老孟司さんが『バカの壁』の中で定義していますが、杏子さんはまさに職人的書店員です。昨年八月に紹介した経済学者の榊原英資さんは、日本の未来は職人的な技術とサービスにかかっている、と説いていました。皆さん、目指す

べきおとな像のひとつがここに描かれています！

多絵(たえ)ちゃんーホームズ役のバイト店員

ミステリにはアームチェア探偵というジャンル(分野)があります。身体が不自由だったり、全盲だったりして、自分は現場に赴くことなく人の話を聞くだけで、ひじかけ椅子に座りパイプをくゆらせながら事件を解決してしまう探偵です。ホームズは自ら捜査に乗り出すことも多いのですが、ワトソン君の話の聞いただけでいろいろな謎を解くのでこのタイプに入れてもよいでしょう。



成風堂書店事件メモシリーズ  
『配達あかずきん』693円  
『晩夏に捧ぐ』672円  
(ばんかにささぐ)  
『サイン会はいかが?』651円  
創元推理文庫  
大崎梢(おおさきこずえ)

西巻多絵さんは、大学生のアルバイト店員で出勤時刻が遅いため、事件のあらましを杏子さんから聞くこととなります。話を聞いただけでたちどころに謎の本質にせまり、自ら調査に出歩くこともあるので、ホームズ型の探偵です。

絵や作文が苦手な人は多絵ちゃんの推理の仕方を参考にしてください。

『サイン会はいかが?』の中の「取り寄せトラップ」は、同じ本を注文した四人が四人とも、成風堂

からの電話に、注文した覚えはないと答えるところから話が始まります。杏子さんたちが不思議に思っている、多絵ちゃんは注文書の筆跡などから、これが同一人物の意図的な仕業であることを見抜き、日曜の夜と月曜の朝に注文したのは、(書店の勤務シフトから考えて)同じ店員と接する危険性が少ないからだ、と鮮やかに推理します。

絵や作文がかけないのは特徴をつかむのが苦手だからです。一つのりんごを見たときに、すべてのりんごに共通な性質と目の前のりんごに特有の性質が見抜けないのです。分析の基本は構造の比較と時間(歴史)の流れの比較にあります。

多絵ちゃんが筆跡(形・構造)と注文日時(時間)に注目したのは、哲学的にもまったく正しい(笑)。

これはただの偶然か?

この推薦文を書くために大崎さんのブログを拝見して驚きました。大崎さんは今年の五月三日に淡路島を訪問し、鳴門の渦潮を見て、タマネギドレッシングをお土産にされたそうです。ブログに大鳴門橋の写真が掲載されています。

私は大崎さんの本を五月二日に購入し、三日の未明、成風堂シリーズを六月の推薦図書に決めました。五月二十一日に淡路島に寄り、渦潮を見て、橋の写真を撮り、お土産はタマネギスूपでした。旅行カバンの中には、『サイン会はいかが?』を入れたのです。ただの偶然と片付けてよいのだろうか? おーい、多絵ちゃん、ちょっと来てくれ。

ロックウェル新大駅前教室 長谷川玲